

娘は、紙の上着を着て、かごを持って出かけました。どこまでもどこまでも、雪のほかなにもありませんでした。

森に入っていくと小さな小屋があつて、まどから**小人が三人**のぞいていました。**娘は、「こんにちは」と声をかけて、そつと戸をたたきました。**小人たちは、「おはいり」ときけびました。

娘は入って行って、ストーブのそばのいすに腰を下ろしました。そして、体が温まってくると、朝ごはんを食べはじめました。小人たちは、

「おれたちにも分けておくれ」といいました。**娘は、**

「ええ、よろこんで」といって、少しのパンを半分に割って小人たちに分けてやりました。

——「森の三人の小人」より

マーシヤが走っていくと、パン焼きかまどの**ペーチカ**がありました。

「ペーチカ。がちようはくちようたちがどつちに行つたか、教えて」と、マーシヤはいいました。

「じゃあ、私の中の黒パンをおあがり」と、ペーチカはいいました。

「黒パン？いやだわ。うちではふわふわしたやわらかな白パンがいつぱいあるのに」と、マーシヤはいいました。すると、ペーチカはもう口をきかず、がちようはくちようたちがどつちに行つたか、教えてくれませんでした。マーシヤはしかたなく、そのまま走っていききました。すこし行くと、大きな**リンゴの木**がありました。

「リンゴの木。がちようはくちようたちがどつちに行つたか、教えて」

「じゃあ、私になっているすっぱいりんごをおあがり」

——「がちようはくちよう」より

お姫さまはとてもものが渴いていたので、馬から下り、ひざまずいて流れる水を飲みました。そして泣きながら、

「ああ、神さま」とつぶやくと、**三滴の血のしずく**がこたえました。

「母上がこれをお知りになったら、心ははりさけてしまわれるでしょう」  
**けれどもお姫さまは何もいわず、黙って馬に乗りました。**

——「がちよう番の娘」より

大工は、川岸に行つてじつと水の流れを見えました。すると、水のおもてに、泡がぶくぶくと浮かんできて、**大きな鬼**が、ブツクリと顔を出しました。そして、大工に、

「腕じまんの大工どん、こんなところで、何を考えているんだ」とききました。**大工は、**

「おれは、今度ここに橋をかけることになつたのだ。どうしたらいい橋がかけられるか、考えているところだ」とこたえました。すると鬼は笑いました。

——「大工と鬼六」より